

徳島大学生の文章執筆における困難についての検討

飯尾健（徳島大学高等教育研究センター）・

上月翔太（愛媛大学教育・学生支援機構）・蝶慎一（香川大学 大学教育基盤センター）

1. 背景と目的

これまで、大学生の文章執筆能力に対する懸念が多く、多くの大学教員から挙げられている。また実際に小山（2016）による学生の文章執筆能力についての調査では、想定よりも学生の文章執筆能力が高くないことが指摘されている。

これを受けて、上月ほか（2025）が示しているように、大学では多くの文章執筆に関する授業が開講されている。しかしながら、果たしてこれらの授業は学生の実態に即しているのであろうか。大学生はこれまで初等・中等教育を通じて感想文等多くの文章執筆の機会を経験して大学に入学している。大学生の文章執筆能力に課題があるとすれば、大学入学以前の文章執筆において何らかの躊躇や困難を経験したことが要因となっている可能性は容易に推測しうる。大学において文章執筆に関する教育を行うためには、これらの躊躇や困難を解消し、学生の実態に寄り添うような教育プログラムを設計することが必要であろう。

そこで、本研究では徳島大学の学生に調査を行い、学生が初等・中等教育を含むこれまでの文章執筆の際に経験した困難を明らかにする。これにより、今後の大学における文章執筆教育の設計に向けた示唆を与えることが本研究の目的である。

2. 方法

調査は2025年10月、第一筆者が担当する授業内で、当日の受講者8名（いずれも1年次）に対して行った。調査では、オンライン付せんツール"miro"を利用し、自由記述形式で「これまで（小学校～大学）レポートや文章を書くとき、何が大変だったか/きつかったか/困ったか/嫌だったか」について自由に付せんに書き出してもらった。

このようにして得られた記述（合計53個）に

ついて、KJ法を用いてカテゴリー化し、さらにカテゴリー間の関係性を図式化した。完成した図式は図1の通りである。

3. 結果と考察

分析の結果、学生の記述からは6つのカテゴリーおよび17のサブカテゴリーが抽出された。以下ではカテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]で囲む形で示しながら、学生の文章執筆における困難がどのような構造になっているかを検討する。

まず学生の文章執筆の困難に関する発端に位置するカテゴリーとして抽出されたのは、文章執筆の方法や求められる文章の基準についてわからない、ないし教えられていないといった【文章執筆の知識不足】である。すなわち、学生はどのように書けばよいかが分からず、文章執筆を求められていたという状況にあった。

このような状況の結果、以下3つのカテゴリーとして抽出された困難につながっていると考えられる。その第1が自分の考えを明確化できない【主張を言語化できない】をはじめとする【書く内容に対する困難】である。第2には接続詞の使い方等の【文章表現上の困難】、さらに第3が文章構成や適切な書き始めが思い浮かばないといった【執筆プロセスにおける困難】である。加えて内容を明確にできることは、文章構成や表現に関する基準やイメージが学生自身の中で明確にならないということにもつながりうる。したがって、【書く内容に対する困難】は【文章表現上の困難】および【執筆プロセスにおける困難】にも影響を及ぼしていると推測できる。

これらの困難を抱えたまま執筆を続けることで、学生の文章は内容よりも指定された文字数に収めること、すなわち【文字数が足りない】ことや

[文字数の削減が大変]といった【文字数調整の負担】が文章執筆における大きな課題であり、また文章執筆における主要な焦点になってしまっていると考えられる。

加えてこれらの困難は、【学習活動としての「作文」への苦手意識】にもつながっていると推測される。すなわち、学生は執筆に向ける意識が内容や表現よりも教員がどのような文章、とくに主張や内容を評価するかを意識せざるを得ない[「望ましい作文」への負担感]を感じると考えられる。また[「望ましい作文」への負担感]は、それを意識することできさらに自身の率直な考えを文章に反映できなくなり、【書く内容に対する困難】を増幅させうると言える。加えて、他者も同様の困難を抱えていることを意識することは、ピアレビューの際にそれらを指摘することにためらいを感じて他者へコメントすることに躊躇したり、逆にコメントが浮かばないといった[他者へのピアレビューがしにくい]ことにつながりうる。

4. 今後への示唆と課題

本研究からは、文章執筆経験における困難を抱えた学生に対する文章執筆教育の設計について有用な示唆が得られると考えられる。とくに、執

筆の前にあらかじめ文章の書き方や「よい文章」とは何かについて理解する機会を設けることは重要であろう。さらに Beaufort (2007) によれば、「よい文章」やその書き方は書き手と読者が属する言説共同体に依るところが大きい。したがって、それぞれの共同体に「よい文章」とは異なること、加えてこれから求められる文章はどのような共同体によって「よい文章」であるかを示すことが不可欠と言える。

今後は本研究の成果をもとに、実際のアカデミック・ライティング教育の設計と実践、効果検証ならびに効果検証を進めていきたい。

参考文献

- 上月翔太・蝶慎一・飯尾健 (2025) 「ライティング能力育成のための授業科目の現状と課題」
SPOD フォーラム 2025 ポスターセッション.
小山治 (2016) 「学生のレポートを書く力の熟達度—社会科学分野の大学4年生に対する聞きとり調査—」『大学教育実践ジャーナル』14, 9-16.
Beaufort, A. (2007). *College Writing and Beyond: A New Framework for University Writing Instruction.* University Press of Colorado.

